

『今昔物語集』における知性の表現に関する一考察

―チエ（智慧）とザイ（才）を中心にして―

黒田佳世

序論

『今昔物語集』の語彙に関する国語学的研究は、『今昔物語集文節索引』の刊行と相俟って近年著しく発達してきている。しかし、『今昔』の語彙量の膨大さが障害となって研究が阻まれていと言えよう。このような状況にある『今昔』の語彙の研究について佐藤武義氏は「学問として語彙の研究を体系的にとらえられない」（注1）と提言されている。その方法として氏は、「類義語の類聚によって、その相関性を見出す方法をと

り、その部分体系を積み重ねることによって語彙の体系を見出そうとされている。その具体化の第一歩として「男女の容貌、姿態の美しさを示している語を採集し、これらの語彙の相関性と示差性を考察」（注2）されている。

『今昔』の語彙の体系的な研究の不充分さを感じていた私は、佐藤氏の提案に共鳴して、語彙の体系を見出すための部分体系のひとつを追加するつもりで人間の知性を示している語の採集を行った。人間の知性を示している語を対象とした理由は、やはり研究考察が完全には行き届いていないと思われたからである。

知性を示している語を収集して、その用例数とともに整理して一覧表にしたものが表―である。表―

には十三語を記しておいたが、他の語と比較してとくに特色が見られたチエ（智恵）とザイ（才）の二語について考察したことをのみここでは取り上げる。

一、チエとザイの用例数とその特徴

表一（注3）

チエ（智恵）	50例
ザイ（才）	43例
カシコシ（賢コシ）	136例
サカシ（賢シ）	9例
サトリ（智リ・識リ・悟リ）	103例
チ（智）	8例
ソウミヤウ（聡明）	7例
ソウビン（聡敏）	8例
ワキマヘ（弁ヘ）	1例
ベンザイ（弁才）	2例
リコン（利根）	2例
トシ（利シ）	1例
ゲンサウ（賢相）	1例

表二

		部			
		竺		天	
		卷		チエ	ザイ
0	0	1	2	6	1
1	1	2	3	5	1
2	2	3	4	7	0
3	3	4	5	13	0
4	4			1	1
5	5				
6	6				
7	7				
8	8				
9	9				
10	10				
11	11				
12	12				
13	13				
14	14				
15	15				
16	16				
17	17				
18	18				
19	19				
20	20				
21	21				
22	22				
23	23				
24	24				
25	25				
26	26				
27	27				
28	28				
29	29				
30	30				
31	31				
32	32				
33	33				
34	34				
35	35				
36	36				
37	37				
38	38				
39	39				
40	40				
41	41				
42	42				
43	43				
44	44				
45	45				
46	46				
47	47				
48	48				
49	49				
50	50				
51	51				
52	52				
53	53				
54	54				
55	55				
56	56				
57	57				
58	58				
59	59				
60	60				
61	61				
62	62				
63	63				
64	64				
65	65				
66	66				
67	67				
68	68				
69	69				
70	70				
71	71				
72	72				
73	73				
74	74				
75	75				
76	76				
77	77				
78	78				
79	79				
80	80				
81	81				
82	82				
83	83				
84	84				
85	85				
86	86				
87	87				
88	88				
89	89				
90	90				
91	91				
92	92				
93	93				
94	94				
95	95				
96	96				
97	97				
98	98				
99	99				
100	100				
101	101				
102	102				
103	103				
104	104				
105	105				
106	106				
107	107				
108	108				
109	109				
110	110				
111	111				
112	112				
113	113				
114	114				
115	115				
116	116				
117	117				
118	118				
119	119				
120	120				
121	121				
122	122				
123	123				
124	124				
125	125				
126	126				
127	127				
128	128				
129	129				
130	130				
131	131				
132	132				
133	133				
134	134				
135	135				
136	136				
137	137				
138	138				
139	139				
140	140				
141	141				
142	142				
143	143				
144	144				
145	145				
146	146				
147	147				
148	148				
149	149				
150	150				
151	151				
152	152				
153	153				
154	154				
155	155				
156	156				
157	157				
158	158				
159	159				
160	160				
161	161				
162	162				
163	163				
164	164				
165	165				
166	166				
167	167				
168	168				
169	169				
170	170				
171	171				
172	172				
173	173				
174	174				
175	175				
176	176				
177	177				
178	178				
179	179				
180	180				
181	181				
182	182				
183	183				
184	184				
185	185				
186	186				
187	187				
188	188				
189	189				
190	190				
191	191				
192	192				
193	193				
194	194				
195	195				
196	196				
197	197				
198	198				
199	199				
200	200				

それぞれ五十例と四十三例の用例が存在するチエとザイの特徴は、知性を示している語がいくつかあるなかで両者の用例がほぼ同数に近いということと、両者の巻別の用例数に一定の偏りがあることである。両者の巻別の用例数を一覧表にしたのが表一、二である。『今昔』には仏教説話で構成された巻（一、五、六、七、一、一、二〇）と世俗説話で構成された巻（九、一〇、

二二(三一)がある。チエは全用例である五十例が仏教説話で構成されている巻に存在し、ザイは四十三例の中で半数の二十一例が世俗説話で構成されている巻に存在しているのである。そこで次にチエとザイの個々の用例についても調べてみた。

二、チエとザイの個々の用例

チエとザイの個々の用例を調べる方法として、チエあるいはザイで知性を表現されている人物が、誰であつてどのような状態であるのかということを出出して分類をするという方法を用いた。この方法だとチエあるいはザイで知性を表現されている人物の傾向がうかがえるのではないかと考えたからである。では次にチエとザイ各々について、知性を表現されている人物の個々の例を前述の方法で分類した結果とそこから考察したことに述べることにする。

1 チエについて

チエであってもザイであっても、これらで知性を表現されている人物は大きく分けて、仏教に直接関係する立場の人物とそうでない一般人とに分けられた。

チエの場合、仏教関係者が二十七例、それに対して一般人が六例であつた。仏教関係者の用例は次の通りである。

①「仏陀」について：一―五、一―六、一―一二、以上三例

②「仏弟子」について：六例

イ「舍利弗」について：一―九、三―四、三―五、三―六、以上四例

ロ「阿難」について：三―六、以上一例

ハ「僧沢」について：四―一〇、以上一例

③「菩薩」(この場合の菩薩は「さとりへの成就を欲する人。さとりを求めて修行する求道者。」(『仏教語大辞典』)のことで、観音・勢至・弥勒などのような固定した対象のことではない。(注4))：六例
イ「龍樹菩薩」について：四―二五(三例)、以上三例

ロ「无着菩薩」について：四―二六、以上二例

ハ「護法菩薩」について：四―二七、以上二例

ニ「清弁菩薩」について：四―二七、以上二例

④「僧・聖人・和上・阿闍梨」について：一一例

イ「僧」について：六―五、七―二四、一一―五、

一九―一四、以上四例

ロ「聖人」について：六―三、一四―一〇、二〇
 一―二、二〇―一三（二例）、以上五例
 ハ「和上」について：三―二〇、以上二例
 ニ「阿闍梨」について：三―二〇、以上一例
 ⑤「寺の学生」について：一五―一、以上一例
 以上の二十七例である。これに対して一般人の用例は
 わずか六例に過ぎない。

①「釈摩男」について：二―二八（二例）、以上三例
 ②「憂陀夷」について：一―三、以上一例
 ③「迦毗利」について：二―三四（二例）、以上二例
 ④「転輪聖王の皇子」について：五―九、以上一例
 釈摩男、憂陀夷、迦毗利、転輪聖王については後に説明をする。

前述のことから、チエで知性を表現されている人物は仏教関係者が非常に多いことがわかる。このため仏教説話で構成されている巻に用いられることになったのであろう。それにしても、チエは仏教的色彩の強い仏教説話にのみ用いられ、仏教関係者の知性を表現することが多い。また一般人の場合の用例でも、釈摩男は仏陀を輩出した釈種の国迦毗羅衛国の長老でもあり師でもある人物であり、憂陀夷と迦毗利は後に仏道修行をする少年であり、転輪聖王は『今昔』では仏教の

ために生命も惜しまない王であって、全て仏教に関与する人物である。以上のことからチエは仏教的な知性を示していると考えられよう。

表一三（注5）

説話文学	軍記物語	物語文学	作品名
沙古宇三日本 石本治宝霊 集説拾絵異 集話遺詞記	平平 治家 物物 語語	堤夜狭源落宇 中の衣氏窪津 納の寝物物保 言言物語語語 物覚語語語語	チエ ザイ
○ × ○ ○ ×	× ○	× × × × × ○	
× ○ ○ × ×	× ×	○ ○ ○ ○ ○ ○	

このような現象が『今昔』にのみ見られるのか、あるいは『今昔』と同時代の文学作品に共通するものであるか確証を得るために、中古・中世前期の文学作品からチエの用例を求めたことにした。文学作品は物語

文学、軍記物語、説話文学の三つのジャンルから十三の作品を使用した。それら十三の作品におけるチエの有無を一覧表にしたのが表―三である。チエが物語文学や軍記物語にあまり用いられず、『今昔』と同じような仏教説話を含む説話文学の作品によく用いられていることがわかる。さて、それらの作品におけるチエの用例であるが、十三例存在した。それらについても『今昔』と同様に、誰にどのような状態で用いられているか分類したところ、次のように仏教関係者の用例ばかり九例であった。

① 『宇津保物語』：一例（一例）

このつきて去にし師、法などうけつくして賢きち多なりければ：（忠こそ）

② 『平家物語』：三例（三例）

いかむがやんごとなき修学者、智恵ふかき大修たちには：（巻二 一行阿沙利之沙汰）

況んや智恵高貴にして三千の貫主たり。（同右）

其子に如無僧都とて、智恵才学身にあまり：（巻

六 祇園女御）

③ 『三宝絵詞』：一例（一例）

（天台の大師は）智慧神明にして无碍の弁才をえたり。（下巻 比叡霜月会）

④ 『宇治拾遺物語』：四例（八例）（注6）

西天竺に龍樹菩薩と申上人まします。智恵甚深也。

（第一三八話）

大師の智恵深くましますよしうけたまはりて（同右）

智恵ある僧にて、こたふるやう（第三四八話）

智恵なき聖は、かく天狗にあざむかれけるなり。

（第三七六話）

（ ）内の用例数は、その作品におけるチエの全用例である。ただし、『三宝絵詞』についてのみ、一般語としてのチエ（後述するが古語としてのチエには仏教語と一般語がある。）と判断した用例の数が記してある。それにしても一般人の知性を表現しているチエの用例は一例も存在しなかった。表―三やこの事から見られる現象は『今昔』の場合と同様の傾向を示しており、中古・中世前期における文学作品に見られるチエは、『今昔』も当然含めて、仏教的な知性を表現している」と断定することができよう。

2 ザイについて

ザイの用例は、チエの場合と全く反対に仏教関係者

がわずか八例で、それに対して一般人は三〇例にも達している。まず一般人の用例は次の通りである。

①「天皇・皇族」について：三例

イ大友皇子について：一一―三〇、以上一例

ロ孝謙天皇について：一一―四、以上一例

ハ直世王について：一一―五、以上一例

②「貴族」について：一七例

イ氏名不詳の大臣について：一一―三、以上二例

ロ藤原広継について：一一―六、以上一例

ハ藤原義孝について：一五―四二、二四―三九、以上二例

ニ藤原師尹の五男（氏名不詳）について：一九―九、以上一例

ホ源光について：二〇―三、以上一例

ヘ河内守（氏名不詳）について：二〇―三六、以上一例

ト小野宮実頼について：二〇―四三、以上二例

チ藤原不比等について：二二―二、以上一例

リ藤原房前について：二二―三、以上一例

ヌ藤原内膳について：二二―四、以上一例

ル藤原良房について：二二―五、以上二例

ヲ藤原基経について：二二―六、以上二例

ワ藤原冬嗣について：二二―七、以上一例

カ藤原齊信について：二四―二九、以上一例

ヨ小野宮実資について：二七―一九、以上一例

夕藤原朝成（か？）について：二八―二三、以上一例

一例

③「学者」について：四例

イ紀長谷雄について：二八―二九（二例）、以上二例

二例

ロ清原義澄について：二九―二〇（二例）、以上二例

二例

④「下級官吏」について：三例

イ主計頭小槻系平の子について：二四―一八（二例）、以上二例

例）、以上二例

ロ伊豆守小野五友の目代について：二八―二七、以上一例

以上一例

⑤その他：三例

イ舍衛国の長者の息子金天について：二八、以上一例

上一例

ロ孔子について：一〇―九、以上一例

ハ唐の人（氏名不詳）について：二四―二二、以上一例

以上の三〇例である。では次に八例の仏教関係者の用

例についてであるが、仏教関係者の用例は、はじめ一般人で後に出家した人物とはじめから僧侶である人物に分けられる。まず、はじめから僧侶である人物の用例は次の通りである。

①「僧侶」について…三例

- イ「覚縁律師」について…一九一二三、以上二例
- ロ「源信僧都」について…一五—三九、以上二例
- ハ「氏名不詳の僧侶」について…一九一二一、以上一例

以上三例である。次に、はじめ一般人で後に出家した人物の用例は少し多く五例である。しかし、次からもわかるように、はじめ一般人で後に出家した人物にチエが用いられている場合、出家以前の在俗時で朝廷に仕えている時点に用いられている。だから、この場合、仏教関係者の用例ではあっても一般人の用例に近いと言える。

②「はじめ一般人で、後に出家した人」について…五例

- イ「高階良臣」について…一例
- 宮内卿高階ノ良臣ト云フ人有ケリ、殊ニ身ニ才有テ文ノ道ニ達レリ。(一五—三四)
- ロ「慶滋保胤||寂心」について…一例

内記慶滋ノ保胤ト云フ者有ケリ…。心ニ慈悲有テ身ノ才並ビ无シ。(一九—三三)

ハ「良峯宗貞||花山僧正」について…一例

藏人ノ頭右近ノ少将良峰ノ宗貞ト云フ人有ケリ、…(中略)…身ノ才人ニ勝タリケレバ、天皇殊ニ睦マシク思食シタリケリ。(一九—二一)

ニ「大江定基||寂照」について…二例

入道寂照ト云フ人有リ、俗ニテハ大江ノ定基ト云ヒケリ。身ノ才、止事无クシテ、公ケニ仕ケル程ニ、道心ヲ発シテ出家セル也。(二七—三八)

参河ノ守大江定基ト云フ人有リ…。身ノ才人

ニ勝タリケル、藏人ノ巡ニ参河守ニ任ズ。(一九

—二二)

ザイは、一般人の知性を表現する用例が圧倒的に多く、仏教関係者の用例でも一般人の立場である時点のことが多いことから、チエとは反対に一般的な知性を表現していると判断してよいのではないだろうか。中古の物語文学において「才(ザイ・ザエ)」は「学問。特に、漢学・漢詩文等の学識」(岩波古語辞典)を示し、「理想的な人間の条件に挙げ、また人を讃める時には必ず」(注7)「才」と称すほどでもある。また、

『今昔』と同じように仏教説話と世俗説話で構成され、チエとザイ両方の用例がある『宇治拾遺物語』でも、ザイの用例は次のように四例すべてが世俗説話に在って一般人の知性を表現している。

今は昔、三条中納言といふ人有けり。…才かしくて、もろこしのこと、此の世のこと、みな知り給へり。(九四 卷七ノ三)

いまは昔、主計頭小槻当平といふ人ありけり。その子に算博士なるものあり。名は茂助となんいひける。…なりつたはりたる職なるうへに、才かしく、心ばへもうるせかりければ、…(一二二 卷一〇ノ九)

昔、備中國に郡司ありけり。それが子に、ひきのまき人といふ人有けり。…その後、文をならひよみたれば、たゞ通りに通ひて、才ある人になりぬ。おほやけ、きこしめして、試みらるゝに、誠に才深くありければ…(一六五 卷一三ノ五)

かの大将は、才もかしこくいますかり。(一八三 卷一四ノ九)

以上のことから、ザイが一般的な知性を示していると言えるだろう。

3 まとめ

『今昔』におけるチエとザイの用例は、チエが仏教的、ザイが一般的知性を示していることを明らかに表している。また、このことは『今昔』だけでなく、中古・中世前期の文学作品にも共通して言えることでもあるようである。

三、チエとザイの語義

第二節で述べたように、知性を示すにあたって正反対の傾向を示すチエとザイの、現代の辞書における語義やその他のことについて触れながら、チエとザイの語義について考察したことを記す。

1 チエについて

チエは現代では「物事の筋道がわかり、うまく処理して行ける能力」(岩波国語辞典)を意味し、知性の類義語ともされている(注8)。古語のチエについて古語辞典によれば「①物事を明確に察知し、正しく判断する心の働き。②〔仏〕▲愚癡の対▽六波羅の第六」

(岩波古語辞典)と、まず一般語としての語義と仏教語としての語義を区別して挙げている。『日本国語大辞典』では一般語としてのチエの語義についていっそう詳細に記載している。「②物事の道理をさとり、是非・善悪をわきまえる心のはたらき。物の筋道を知り、前後をよく考え、計画し、正しく処理していく能力。また、それを有する人。③才知のはたらき。すぐれた機知、工夫、やりくり、思いつきなど。才覚。」で、③は近世以降、②は中世以前の語義であることが、引用されている用例の文献から判断できる。一般語と仏教語では、古語辞典や国語辞典を見ている限りでは非常に隔絶しているように見える。しかし『仏教語大辞典』によればチエは「事物の真相を照らし、惑いを断つてさとりを完成するはたらき。物事を正しくとらえ、真理を見きわめる認識力。叡智(英知)。真実の智慧。」を第一義とし、中世以前の古語の一般語としてのチエの語義と近似している。このことから、第二節で述べたようにチエが仏教的な知性を示す理由を、次のように推察してみた。『大漢和辞典』によれば、中国でも一般語としてのチエと仏教語としてのチエが存在する。一般語としての語義は「さとり。又、分別する心のはたらき。さとし。智慧。」で、仏教語としての語義は

「決断を智といひ、簡擇を慧といふ。又分別妄想を離れるはたらき。」である。中国において一般語としてのチエと仏教語としてのチエが併存することになったのは、中国で元来使用されていた「智慧(恵)」即ち一般語としてのチエがあり、その後仏教の導入で仏典を漢訳する際梵語の「Pañña」を語義の近い「智慧(恵)」にしたため仏教語としてのチエができたからであろう。中団から書物を導入している日本では、一般語としてのチエは中国思想の書物によって、仏教語としてのチエは仏典によって、両者ともに入ってきていたと考えられる。しかし『今昔』や中古・中世前期の文学作品に見出せるチエは、仏教語ではないが一般語としては非常に仏教的に扱われていて、中国で『墨子』や『荀子』、『韓非子』などで用いられているごく一般的な知性を表現している一般語としてのチエとは随分異っている。同じ一般語としてのチエでありながら、中国と日本ではこのように大きな差が見られる。それについて、中国から中国思想の書物によって導入された中国での一般語としてのチエは日本人にとって中国思想的な趣きがありかつなじみの薄い漢語であるために仮名文学には取り入れられ難く、『今昔』やその他の文学作品に見られる仏教的な一般語としてのチエは仏教の普

及・浸透によって仏教語としてのチエが仏典から一般の文献に取り入れられて次第に一般語化して出来たもので、それゆえ一般語であっても仏教的な面を持つことになったと推測するのである。『日本靈異記』にはチエの用例は全くなく、『三宝絵詞』では次の通り三例存在する。一例についてはすでに第二節で『今昔』以外の文学作品におけるチエの用例で記した。

此の会の功德はかならず智慧の光をえて無明のやみをてらすべし。(巻下 薬師寺万燈会)

法師にほどこして経法をかきうつさしむれば、智慧をう。(巻下 孟蘭盆)

(天台の大師は) 智慧深明にして无碍の辯才をえたり。(巻下 霜月会)

この三例の中で、第二節でも記した「霜月会」の用例は人物の知性を表現していることと前後の文意から一般語であると判断し、他の二例は前後の文意から仏教語と判断した。しかし、仏教語と判断した二例の用例が存在する巻下は『三宝絵詞』成立当時の寺院における法要の由縁を説いたもので、仏典のように仏教の教理を記しているわけではなく、仏教語としていちおう判断されるが一般語的雰囲気を擁しているように見える。仏典の中だけに存在した仏教語としてのチエが次第に

仏教と関連のある一般の書物に取り入れられて『三宝絵詞』に見るように仏教語とも一般語とも判別し難いような用例に変化し、次第に『今昔』やその他の文学作品に見られるような仏教的な一般語としてのチエへと発展したと推察される。

ところで、現代の辞書に見られるチエについて、今までに記したものは、一般語としてのチエと仏教語としてのチエを全く別のものとして載せていて、一般語としてのチエと仏教語としてのチエとの関連あるいは中古・中世前期の文学作品における仏教的な一般語としてのチエについては記していない。ただ、『日本国語大辞典』に中世以前のチエについては、「ざえ」「才覚」「才学」に較べて「より精神的な知力をさしたも」と思われる。」と記している。今まで述べてきたように仏教が出所だからこそ「精神的な知力」になるのではないだろうか。『今昔』より少し下った時代の仏教説話集である。『沙石集』の中に「名利ノ心ナクハ学問スヘカラス学ナクハ智慧アラシ智慧ナクハ道心オコリカタシト思ハレケル：」という一節がある。「智慧」から「道心」へ移って行くところが、チエと仏教との結びつきを示す資料のひとつと思われる。また、『黒谷源空上人絵伝』で法然が「智恵第一ノ法然房」(群書類従第

八巻)と記され「才第一」とは記されていないことも
そうかもしれない。

中古・中世前期の文学作品における一般語としての
チエについて、その仏教的な用いられ方や仏教との関
連すなわち一般語としてのチエに内在する仏教性につ
いて、今後の語彙研究あるいは辞書の編集においては
考慮すべきであると思われる。

2 ザイについて

「才」は「㊶め。めばえ。㊶もと、又、基本。はじ
め。はじめて。㊶たち。先天的に有する素質、能力。
天賦。稟性。㊶はたらき。うでまへ。ちから。㊶才
能のある人。すぐれた人。㊶わづか。わづかに」(大漢
和辞典)など多くの語義を有しているが、日本では「㊶
生まれつきもっているすぐれた能力、資質。頭のはた
らき。才能。才知。知能。また、そうした能力、資質
のそなわった人。㊶学問。才識。学。またはそれにす
ぐれている人。とくに中古ごろは、漢詩、漢文の知識
や学力などを意味した。ざえ。」(日本国語大辞典)な
どの意味で用いられている。前にも述べたように「才
(ザイ・ザエ)」は中古の物語文学には必要不可欠な知

性を示す語彙であり、『宇津保物語』や『源氏物語』等
に在る多量な用例によって詳細に研究・考察されてい
る。しかし、さらに、同じ知性を示す語でありながら
仏教的な知性を示すチエとの対比を考えることによっ
ていっそうザイの示す知性が明瞭になると思うのであ
る。

四 まとめ

今まで、チエが仏教的な知性を、ザイが一般的な知
性を示していることを繰り返し述べてきた。表一三で、
物語文学にはザイが、仏教文学である説話文学にはチ
エが多いことも、これによって明らかである。ザイは
一般的知性を示しているからこそ物語文学の知性を示
す代表的な語であり、チエは仏教的知性を示している
からこそ仏教文学の知性を示す代表的な語と言えよう。
物語文学あるいは言い換えれば一般の文学と仏教文学
が並存していた中古・中世前期においてこの二つの語
は知性を示す二大語とも言えるだろう。

ただ、平安時代は物語文学の全盛期であり、平安末
期以降に仏教文学が隆盛することから、ザイは平安時
代の知性を代表する語で、チエは平安末期以降鎌倉時

代の知性を代表する語であるとも言えなくもないだろう。

とにかく、チエとザイの二つの語を対比して考えることによって、中古・中世前期の文学作品における二つの語の存在がもっと明瞭になると私は思うのである。

五 補足説明

中世後期以降のチエについて少しだけ触れることにする。中世後期の『太平記』におけるチエの用例は「文を以て世を治る時は、智慧を先とし、仁義を本とする故に」(巻三七 可立大將事)などのように、儒教的な用例もあり、ここに至ってはじめて中国で中国思想の書物などで用いられていた一般語としてのチエが現われることになる。

近世になると、ザイよりもむしろ「サイカク(才覚・才学)」との関連が考えられる。これによってチエは、仏教のあるいは中国思想的色彩を全く無くしてしまつたのではないだろうか。語義的にも『才覚』の意味に近(『日本国語大辞典』)くなってしまったようである。

明治に入り、哲学用語の「Sophia」を訳すためにチエを用いたようであるが、現代で一般に用いているチ

エに直接影響を及ぼしているとは思えない。『日本国語大辞典』によれば近世の「才覚」に代わって「現代では、むしろ『知恵』の方が一般的に用いられる」ということである。

注

1・2 「今昔物語集における類義語に関する一考察」佐藤武義 国語学91

3 表一における語彙の数値は『今昔物語集文節索引』より求めた。

4 「ぼさつ(菩薩)：①(仏)みずから仏道を求め、他を救済しさとらしめる者。後には、観音・勢至・弥勒など対象が固定し、仏に次ぐ地位にあるものとされた。」(岩波古語辞典)より。

5 対比の資料としての中古・中世前期の文学作品については『源氏物語』『三宝絵詞』『沙石集』を除いてすべて日本古典文学大系(岩波書店)を使用した。『源氏物語』は『対校源氏物語新釈(一)〜(六)』(吉沢義則 国書刊行会)、『三宝絵詞』は『三宝絵略注』(山田孝雄 宝文館出版)、『沙石集』は『慶長十年古活字本沙石集絵索引影印篇』(深井一郎編 勉誠社)を使用した。

6 『宇治拾遺物語』にチエの用例は八例あるが、仏教関係者の知性を表現している四例を除く他の四例は、次のよ

うに第一三八話の龍樹菩薩とその弟子の会話文の中に用いられていて、直接に人物の知性を表現していない。

「水をあたへつるは、我（龍樹菩薩）智慧は、小箱の内の水のごとし、しかるに汝（提婆菩薩）万里をしのごて来る、智慧をうかべよとて、水をあたへつるなり。上人（提婆菩薩）、空に、御心をしりて、針を水に入れて返すことは、我（提婆菩薩）針斗の智慧を以て、なんぢ（龍樹菩薩）が大海の底をきはめんと也。なんぢら（龍樹菩薩の弟子）、年来随逐すれども、この心を知らずして、これを問ふ。上人は、始てきたれども、わが心をする。これ智慧のあるとき「と」なり」云々。

7

津田左右吉『文学に現はれたる我が国民思想の研究(二)』岩波文庫 第八章より。

8

国立国語研究所『国立国語研究所資料集 6 分類語彙表』一・三〇六〇「知識・意見など 知・知勇・全知・知性・理性・悟性・理知・叡知・智慧（知恵）・猿智慧・奸知・悪智慧より。